

十六歳のリップスティック

石明生

(訳 横田勤)

十六歳のとき、私は雑誌に文章を発表した。ある隣町の男の子が手紙を書いて私に寄こした。私の文章がとても好きだと言っていた。それは私が初めて一人の異性から得た真心のこもった賛美だった。

そこで手紙のやり取りを始めた。心の底にすでにあった細やかな思いを、ひっそりと手紙に書き、きれい切手を貼って、それからライラック⁽¹⁾の木の下の緑色のポストに投函した。それは、最高に素晴らしい若い時代だった。私の心の中は喜びと恥かしさに満ちあふれていた。少女のすべての憂いと喜び、暗さと明るさの花びらが、初めて一人の男の子の前で、花のような初恋特有の甘いすがすがしい香りを帯びて、一片一片と開きはじめてののだ。

一度、手紙の中で、男の子は「私たち、会いましょうか？ あなたが来ますか、それとも私が行きましょうか」と言っていた。私は嬉しくて手紙を握りしめ走り出し、運動場の観覧席へ駆け上がっていき、その後、下に向って一步一步降りてきた。

通りかかった階段の踊り場の鏡の前で、無意識にちらっと見ると、見えたのは、少女の赤いほっぺたをしているだけでなく、質素な服を着て眼鏡をかけた、少しも賢くなさそうな女学生で、それこそが本当の私だった。文章を書くこと以外、人に見せられるものを持っていない女学生。しかし文章の中では私は、多くの人が夢見て憧れる完璧な女の子なのである。だがあいにく、母以外にはだれも私が美しいと言った者はいなかった。先生たちはいつも「あなたのような平凡な女の子がもしちゃんと勉強しなかったら、ほかに何ができるというの」、と言っていた。周囲の女の子も「あの人は何のとりえもない人で、おまけに歌を歌うときは音程が狂うのよ」、と言っていた。

私は、男の子が何回も願っていたので、彼に返事を書いて言った。「わかりました。バスであなたの町へ行きます。」

手紙を出しに行ってからすぐ、自分が持っているきれいな服を運び出しはじめ、一着一着きれいな水で洗って折りじわを取り除いた。そして貯めていたお金を取り出して眼鏡店へ行き、こっそりとコンタクトレンズを作った。店の人は温和な女の人で、私のおでこにできたばかりのたくさんの大きなニキビを見ながら、優しい声で、「あなたのような小さな子がコンタクトレンズを付けるのは目に良くないのよ」、と言った。私はうつむいたまま何も言わず、ただジャラジャラと小銭を取り出した。金額は十分だった。そして体の向きを変えると素早く駆けて行った。家に帰った後、母は私がちゃんと洗った服を見て、私の乱れた髪の毛を撫でながら言った。「いつこんなに精を出したの？」私は乾いた服の太陽のいい香りを嗅ぎながら突然笑いだした。私は頭を上げて、母に甘えて言った。「私は本当に変わった？」母は笑いながら言った。「そうよ、あなたは十六歳になって、前よりはずっとかわいくてお利口さんになったわよ」

母のこの言葉で、私には少しばかり喜びと自信が満ちてきた。私は、あのレースの縁飾りの付いたお姫様の着るようなスカートのことを思い出した。以前はそれを着て外出する勇気などなかったスカートだ。そして、それと組み合わせられる淡いピンク色の夏用の靴を思い出した。それに、髪の毛をふわっとさせる青紫色のリボンがあれば十分だと思った。ひょっとしたら、それらは一羽の醜いアヒルの子をきれいにしてくれるだろう。私はそう思った。

こうして私は隣町へ行くバスに乗った。隅のほうで隠れて小さな鏡を取り出し、母の化粧台からこっそりと持ってきた口紅を、塗ってまた塗った。拭ってまた拭いた。あわてていたからだろう、ひどくみっともない赤い一本の線がとつぜん真っ白なスカートの上に付いてしまった。私は懸命に擦った。しかしその痕(あと)はますます鮮明になり、私はとうとうあきらめるしかなかった。

バスはゆっくりと隣町の小さなバスの駐車場に入って行った。駐車場の入り口に、物憂げな顔をした人、ほこりに汚れた顔をした人、大勢の出迎えの男の人や女の人姿が見えた。私はずっと見ていたので目が痛くなった。そしてついに、彼は来なかったのだ、これからも来ることはないだろうとわかった。ひょっとして彼は私よりはもっと劣等感を持っている男子学生であるかもしれないからだ。彼はうそをついた。私とは違って、彼はそれらの善良な嘘に面と向かう勇気を持

っている。

こっそりと家に帰ると、母がちょうど私の寝室を片付けているのが目に入った。彼女はいつものように笑いながら尋ねた。「今日の学校での補習授業、楽しかった？」 私は近寄って行き、とつぜん後ろから母を抱きしめ、声を出さずに泣いた。しばらくして、母はやっと身体の向きを変えて優しく尋ねた。「あなたがコンタクトレンズを作ったことを知っているわ。合っていないので後悔しているんでしょう？」 私は頭を上げず、すすり泣きをつづけながら言った。「ママ。私は大学へ行く前には、もうコンタクトレンズを着けないことにした」

母は私の頭をちょっとたたいて笑って言った。「そうよ、眼鏡をかけている^{アン}安ちゃんほんとうにきれいよ。ママは今日、安ちゃんの恰好はきっとクラスの女の子の誰よりもきれいだと信じてるわ。そうでしょう？ 安ちゃんは誰よりもお姫さまに似ているよ」

それからしばらく経ったある日、私は自分の引き出しの中から、一本の真新しいリップスティックと、小さくて精巧なコンタクトレンズの箱を発見した。私は大きな眼鏡を外して注意深くコンタクトレンズを着けて鏡に向かった。薄く塗った口紅、あの飾り気のない素朴な私は、すぐに明るくきれいにに変身した。その日は私の十八歳の誕生日で、もうすぐ大学へ入るところだった。この特別な誕生日の贈り物は母がくれたものだったのだ。母はメモにこう書いていた。^{アン}「安、今日、あなたはついに一人前になったのよ。もう自分を見下したり憐れんだりする必要はないのよ。私の娘は、心配などせず勇気をもって、本当の愛情と美しさを追求できる……」

かつて自分を卑下していて、他人に称賛されることで自分を励まそうとした女の子は、ついにリップスティックを持つことができる年齢までに成長した。そして成長する時の苦渋と痛みも、そのとき、薄い煙のようにゆっくりと自然に消えていったのだった。

- (1) ライラックは中国では校庭によく植えられている木で、勤勉、謙遜という花言葉を持っているが、愛情と幸福の象徴ともみなされている。

(『中国微型小説排行榜 2012 年』百花洲文芸出版社，南昌市，2013，pp. 282-284.)

（中国語原文）

十六岁的唇彩

石明生

十六岁那年，我在杂志上发表了文章。有一个邻城的男孩写信给我，说好喜欢我的文字。那是我第一次从一个异性那里得到这样真诚的赞美。

于是便开始书来信往，把心底早细腻的一份情思，悄无声息地写在纸上，附在美丽的邮票上，而后投进丁香树下绿色的邮筒里。那是最美好的一段年少时光吧，我的心里充溢着欣悦和羞涩，少女的所有忧伤和欢喜、晦暗和明亮，第一次在一个男孩子面前，花儿一样带着初恋特有的甜蜜和清香，一瓣瓣绽放开来。

有一次在信里，男孩子说，我们见面好吗？你来或者我去。我握着信疯跑到操场高高的看台上，而后再往下一步步走。

路过一个楼梯口的镜子前，我无意中一瞥，看到的，不仅是脸上少女的红晕，还有一个衣着朴素戴着眼镜的毫无灵气的女生，那才是真正的我！一个除了写字再无优点可以展露的女生。文字里的我，不过是梦里渴盼中的那个有许多人喜欢的完美女孩。可是，偏偏，除了妈妈，再无人说过我是美的。老师们总是说，你这样平凡的女孩，如果不好好学习，还能做什么呢？周围的女孩子也说，她是一个多么平淡无奇的人啊，她连唱歌都走调呢。

但我还是在男孩一次又一次的请求下，回信给他，说，好，我坐车去你的城市。

信寄出去的那一刻，我便开始搬出自己所有漂亮的衣服，一件件地用清水洗，去除那些折叠的痕迹。我又取了自己积攒下的钱，去眼镜店，悄悄配了隐形眼镜。店主是个温和的女人，她看着我额头新冒出的旺盛的痘痘，轻声说，你这么小，戴隐形对眼睛不好的。我低头不言语，只是哗哗倒出大堆的零钱，数够了，便转身飞快地跑掉。回家后妈妈看着我洗好的衣服，揉揉我乱蓬蓬的头发，说，什么时候这么勤快了呢？我闻着衣服上太阳的香味，突然笑了。我昂头冲妈妈撒娇，说，我真的变了吗？妈妈笑着说，是啊，你十六岁了，比以前更可爱乖巧了呢。

妈妈这句话，让我一下子充满了喜悦和信心。我想起那件从没有勇气穿

出去的蕾丝花边的公主裙，想起可以与之搭配的浅粉色凉鞋，还有能够将头发松松挽起的紫蓝色丝带。或许，它们会让一只丑小鸭漂亮起来吧。我想。

就这样坐上了去邻城的汽车，躲在角落里，掏出一面小镜子，将从妈妈梳妆台上偷偷拿来的一管口红，涂了又涂，擦了又擦。因为慌张，把一道难堪的红色污痕赫然划在了洁白的裙子上。我拼命地擦啊擦，但那痕迹却是愈来愈去鲜明，直至最后，我终于难过地决定放弃。

车慢慢地开进邻城的小站。我在小站的门口看见一大堆来接站的男人女人，一脸的慵懒，一脸的灰尘。我一直看到眼睛疼了，才终于明白，他没有来，也不会再来了。因为，他或许就是一个比我还要自卑的男生。他撒了谎，却不像我，有勇气来面对那些原本善良的谎言。

悄悄地回到家，看见母亲正帮我整理卧室。她依然笑着问我，你今天在学校补习功课开心吗？我走过去，突然从背后拥住妈妈，无声地哭了。过了许久，妈妈才回转身，温柔地问我，知道你配了隐形眼镜，是不是因为不适，后悔了？我没有抬头，哽咽不止，说，妈妈，我在没有读大学以前，再不会戴隐形了。妈妈拍拍我的脑袋，笑道，可是不戴眼镜的安的确漂亮呢，妈妈相信你今天一定是班里打扮得最漂亮的女孩子，对不对？没有人比安更像公主呢。

后来有一天，我在自己的抽屉里发现了一管崭新的唇彩，还有一副小巧的隐形眼镜盒。我摘下笨重的眼镜，小心翼翼地戴上隐形眼镜，又对着镜子，淡淡地涂上一层唇彩，那个素朴的我，即刻变得鲜亮润泽起来。那一天，我十八岁，即将进入大学，这份特殊的生日礼物是妈妈给的。她在留下的纸条上说，安，今天，你终于长大，无需再那样卑微和自怜。我的女儿，可以勇敢无忧地去追求真正的爱情和美丽了……

那个曾经自卑到试图用别人的称赞来鼓励自己的女孩，终于长大到可以拥有一管唇彩的年龄。而成长中的苦涩与疼痛，也在这样的時候，如轻烟一样，从容自然地淡去了。

